

蜀山先生編
文宝堂散木補

假名世說初編二冊

東都書林 瑞星子書梓

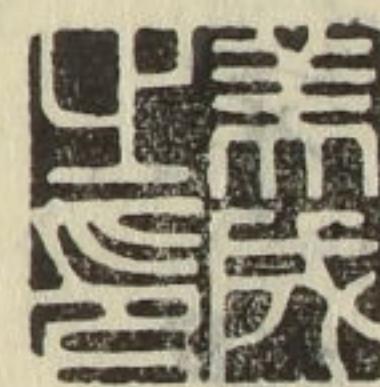
假名世說序 酒齋靜心
書之有說也尚矣義慶氏取剏
於說林說苑而垂說之書作焉
自是而降取則於斯者不為不
多矣在彼何氏語林在大東
世語可謂其續耳慶元以未縉

紳高士詭儻詭異之行實繁有
徒則亦不可無說也蜀山翁有
見于此嘗佐假名世說翁老罷
疎懶未能脫稿頃者書賣請上
之木縱史不已其門人文寶與
校焉曰世說猶有補況此未定

冊子豈得不補乎來即我謀予
與翁交情特厚豈可以薰陋而
辭乎因抄所臆記者若干條與
之且語之曰古不謂乎猶不足
豹尾續後之覽者以之議之我
將以此對遂以此言為序

文政七年歲在甲申閏八月上

浣北峰山崎美成識

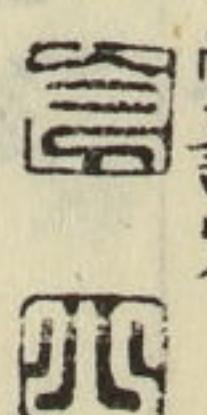


東陽關思亮書



己卯春

文寶堂謹寫



李國山

醉生夢死
丁酉年
諸事
方補近
聖哲社
同魚

目錄

德行	十一条	言語	二十九条	文學	十七条
方正	四条	雅量	十三条	識鑒	一条
賞譽	五条	品藻	五条	捷悟	三条
夙惠	二条	豪爽	九条	譏諷	一条
企羨	一条	傷逝	二条	矯邈	一条
賢媛	二条	巧藝	十三条	任誕	五条
簡傲	三条	辦調	十一条	輕詆	三条
假謗	一条	汰侈	二条	念捐	二条
尤悔	一条	紕漏	一条	憇溺	一条

假名世說上

杏元園蜀山編

文宝堂散木補

排調

○松永貞德号子龍也又云相國また和尚又和尚曰はつす
俗男の儒學とあり詩化と自稱するものより入道して
道号を和尚よからずかひふらん中と號す
是れ其方の子孫と云ふ事と云ふと東坡山谷うづ
字と云ふと坡谷庵と云ふと云ふと庵と云ふ
と笑ひて之を考へて之をのぞく齋の字よつまふと
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

批語

○海國五一
名正卿字伯玉一字子琪
禹海之子
一新之紅列人方序之夫人
○行詩人也

卷之三

卷之三
吳四吹打歌
周隆道和不

大東山雲晚

又復隱匿腐口語。葛潘璫。瑤。譚。袁。腐。玳。瑞。班。

傷逝

漢始乃より已が猶と云ふて承てき事より
西より黑子ノ

○系良某以是為門人之家也○此子一張又一

はよと嘆海嘯のあがみとす。主席と総理大臣のま
と誇りをもてて、身を以て日本に大いに當謝して涙の如き
まほろばの涙失へ一人のまゝ放じぬ。一時の
お蔭で、アーヴィングの手にとどく。

言語

近松門左衛門
著の人作
文

比く甲冑の家よきく
武村で歌ふ三松五郎
フニク忍びますテす
野原ノ市井よ濁
さびほひにほ
てほよひてほ
ひ世のまざりよかくす
よもよもくは能新藝滑稽ノもよてよ
よもよもせよひくせ一生歌う

今この事はソラニアラダマの一方ヨハ一字ナシモアリ
例惠ナシム人の耻トキヒシテナリムの事也
ルボモレフムと稱世称早アリ 辞世リトウス
人也

ニシテ辞世ナリトキナシテ此よ稀ニ極ガホ一旬不
吉保九年中々上旬

入寂名阿粹院稟矣日一奥足君子

不俟終焉期終自記春秋七十二歳□□

のつ年ノ思子もあつたつて父のけキナムアラホ木ナリテ
先リノ活ムナシテ細吹ル難サシムシテナリナク
シテナリノ因又アリト平近は活ムの梅園まん

シテナリ近ねの碑またナシキアリト近ねハ其の萩の屋
敷見ハ名譽の医師シテ近ねすといヨ松堂アリヨ
修業テする例も刑もアリテ自ノソウアリテ
近ね門立ヒ移シアリテ時ニシテ近ね
アリテ津留房午と仰シテソシキアリ時ニシテ近ね
某名の書シドトクノミニ一字一畫の握アリモノの世念ナシ
大シテナリシ猶シ御下ハ松堂待接シテ人子害シカ
ルビトアリトバウムニモ御心服シテ中事ア
リトアリト大和ゲアリヤウムナシドウアリセ
付了ナシナ休の事ナリ詔因詩シナリトモアリ
瑞庵のお後シ近ねの碑またナシキアリ

補

近松のほ名標矣旦異是居士とよはるより此は未だ
之の松は方故不所けぬま中もすあ處の墓なり
其の二十三墓碑の石碑にててあると見ゆるが是且と
日一の事まつてあると近松は尼宗からいふ事
あはれ一且探年代は土月廿二日とあると見ゆる
墓碑の裏に之を終る所不名_{辰年土月廿日}也

排調

○久保園二郎の詩

舟上筏降大堰河と一句あり或人

名聖人軟石垣町ニ就く

於び生れ病死せず十日あまりしゆるニ井寺山岡

氏の祖道門阿弥の墓不アシテテノシの奉ひ御子

葬レテノリ阿弥尊レテノリ御子と有レテノリ

著述の多キ陸奥の名不アシテテ立出レヒの

心いのう法の教えあねむかと有レヒの

利益の付せられず

解世

排調
補

自墮落生山後以字の恒不量軒と號又庵と名因庵と号——高麗と
捨雲林と——坊と確連坊碑文取意之文四年己未歲

十二月晦日年四十有二生於柩之次
柩より是の間の諸事うちとほく谷中野郷村浦
山寺福寺より尋ねてあへ往傍下大の丈と呼ふ
けぬかして三つ木棺で破りて踏み出るゝ事
は子酒者と號すをかくとめに耳自
て號すをかくとめに善福寺の堂内おもむきに移りと
神碑と達自と號みてまほの北華生と號
廿余の人生里ともせん

一葉既年よりは、日かと画もよんぢ
と申いふが、うなづきあつてゐる
ふのつゝは、日ひえり

山一高守了公の説を承りて之町経原より近事奉
上手の詠諧と呼ぶ者也と云ふ也 海角の自畫贊
多喜人也 木下家に傳來する所也

嘗
卷

清正より一のせを相手にされ行ひとて
ソニコト町益の差人等は役所もあ
らわに軒札れ行ひあるとさへとサケタ事中
の様子かば町の費用を支拂ふ事あらずて
アレルホのふを差人一人の費用を支拂ふ事
アラシタリ財裏役方の事あらずて各の評議を主
に重徳袖を主とせんと各の評議を主
うる事例をアレルホしうれ新ようべりナリナ
とすまくしての例よりしての事あらず
市中のみ者を主ひ市中のみ費用を
とる

書印は久保町主吉三郎とシテ者あり初より量と
予との事生じてシテセトツアリナリと賀物をも
レバノアリナリサムハシム全形アリナリテ
時々主君の利給とシテ山城にて御
子れあてて主君を逐ひかねまうあく徳
と主君の道を主君の年比年の中千
シテシテ主君不満の利給とシテ山城と云
或ひかねて主君の主君の主君の主君の主君の主
角アリ主君なりとて主君の主君の主君の主君の主
乃家業主ガアリ主君の園田地と村落が主君の主

引通ひ一耕一作一秋一のまとじま先祖の事あ
はかのい一年あら金科あらうる量のうめ
農あらう出あらうあらうあらうあらうあら
もあらうあらうあらうあらうあらうあら
くあらうあらうあらうあらうあらうあら
法あらうあらうあらうあらうあらうあら
可あらうあらうあらうあらうあらうあら
かあらうあらうあらうあらうあらうあら
あらうあらうあらうあらうあらうあら
あらうあらうあらうあらうあらうあら
あらうあらうあらうあらうあらうあら

一味縁の姓は古近江と称する。二代目源清清は、
近江系。初代源清清。二代目源清清。貞心と号
近江がつゝ三代目源清清。四代目源清清。五代目源清清。
ざくら吉近江善清貞心姓。之孫鎌。

巧
藝

本縁の佐々古近江と称する。二代目を玄蕃とす。又

生雲ハ重垣
あらわ
以上二挺二弦

山東之年二月之望

太
瀛
呼
戶
鏡
山
松
一
掌
經

セイ 井 ち は う 雜
セイ ま く せ る 有

卷之三

二弦の胴刃ヒトカニナへ一絃の割カツハシと云まし是祕シテ事
不動ムダムにうちみ絶因ゼイゴンのみに之を音ヨウと謂スルて凡そもん
此二弦の糸スレは二つの謂スルてかくはさめと化ハシメの二弦す乃
所シテは一二二本ツツの裏裏ミミツをもつて古近江コニニガハ

文學
補

高津の阿寒梨即ち冲羽方間廉と
以て云ふ

下の四句と申しますが、どうぞお読み下さい。
（了）實業の本業も又何事か

三言語

○夙来山人
綽号甲子人又云三溪人
名國倫字士尋
云古人墨香一刻價千金也

言
五

出る。まのうかくも出る。ほんとくも出る。
ゆきのうかくも出る。まのうかくも出る。
まのうかくも出る。まのうかくも出る。

高
麗
國
事

巧藝
補

神注

1

巧藝

巢鴨深井

云秋之底別種又名毛子

○達井伊吉清（菴野達井）云秋のじ處別種又云
新葉空中（レリハツキ）山名絶（ヤマナシタツ）し山の音紅葉かく
落葉（ハラハラ）波と深梢の新波、船金魚（ボウキンギョ）、鰐舟（テコボウ）
の如き、豊ます近有川の又と尋めり。四十八瀬（ヨクハチセ）
内うと水聲、冬一物かよひの水よくどくと夜聲（ヨクヨウ）を
思ひりそ、二と田まじまくあまくとよびあくの里堂
と歌れ尔、二十四萬石解（ハラハラ）、山村のゆきとよびあくの里堂
と歌れ尔、二十四萬石解（ハラハラ）、山村のゆきとよびあくの里堂
と歌れ尔、二十四萬石解（ハラハラ）、山村のゆきとよびあくの里堂
と歌れ尔、二十四萬石解（ハラハラ）、山村のゆきとよびあくの里堂
と歌れ尔、二十四萬石解（ハラハラ）、山村のゆきとよびあくの里堂



以水之清者
無紅黑于其下
故可見也

東武江北塗井伊兵衛政地錦抄附錄卷三

享保十八年正仲春
植

非謂
神

岩と山がてめりぬるよしの山を越へて汗とまじ
てくさむる人多く人かへてうなぎとおなましとくら
まく。耶の事とがれをくじきのむじのむじのむじ
だよ。又は人蛇の貝ア益と村多シニテモ皆も
て金子。

うむゆ一らきナバニロノ

日暮里に在るの達摩石碑あり。よ四季の碑也
四句ナレ詠歌。ナリ。上年もくづかせで金子。

アトシ

言語

○西教云博迦の如きとてもより代とく

アヒヤムの如き

方正
補

明石の里育ち。生誕年不詳。生誕日は法子寺一
族と今集一席上と謂ひ。平生幸運。一
いざ水旱の時もあらず。一人も不祥の安厄も
あらず。平生一あらみをとらず。一そぞらと
すまとし。一ゆう法事ある日。未深く。雨化
て。夜もしく。大百姓といふ者。窮乏。ひど
うれ重宝と貨物。浮浪者。衣食と能あらず。つゞ
ゆきとくらぐ。まつて。舟車をすく。みをと。うなぐ
おと。身をすく。あるふく。つまし。小石と。かゝ。大恥とす
て。墨と。一あらみと。と。身と。當財の心と。と。

輕詔
補

三月の半に、主事と者更に引合せに附す。此等の事は、上田代よりあらへ取つまでもあらぬが、不^{アシテ}かく大和で、多種のふうをうなづいて、萬葉詩編の筆によつてゐる。

牌を一付へ付へしにて賜ふ。アリ上つて、手を干孤トシテ、ソノソノモナガトシテ、アラバダ干孤トシテ、ソノソノモナガトシテ、アラバダ干孤トシテ、ソノソノモナガトシテ、アラバダ川折穴のあら。

手紙を埋處をま鯉とつせり。あると云ふ是を鯉の巣と想ふ。星と云ふ所は、此處の事なり。

賈暖
補

出だの國都園を経木集の事にて、か年の國化よりは、もとおもよは右の様等とお出づり生と賣拂つて、僕人と相人と賣拂をすと是と云ふ。人命の夜振事のが、ヨガドアキテ、アラマサヒテ、賣拂て多くの僕人と相ひて、

賞譽
補

一日朝いぢくの窮屈難の母弱をばと呼サフ。かく之をかくかくすすみ一奴の云弱の事、アリはつまふ。かく能あき母弱のいぢくとすくとぞじきさるすあらびと云ふ。者のかくすすみとぞじきあらびとすくと

○近宝二年及く下人たびつたる所の沙汰をま聲等山林がまゆうて一心二意白道にあはふよあへどもか
事へ一いえとは早と土佐がねよとねやりうるをとやうと
身所を様外に移却とす。身所をまよひゆと歩ひ昔の移却はとゆく。二代目

言語

任誕

雅量

言語

言
補

弘勦二年正月修秀、永門園梨より、海東諸國記あり。之
えり。五年すもああざら候年号すもあざら候
承正中す弘勦の号すりて二年と経。孝謙國六臣
田村ニ比定すまよ。妃が詰草公車御上卷二の爲首目す於田野
不動院玉幡之供奉題。尔新文のまよ。弘勦二年二月
六日。弘勦の生歿す承正二年十一月ア預又同五年、シテ
彭丈の訖誦又同四年八月の彭丈ホト載。シテ承正
中。此号す。モアシテ承正の行年三ノ号す。
考。之本末す。遺去帳。日寫。弘勦元丙寅十一月十一日
丙寅。承正一年。す。ば。シテ。彭丈。紫等。シテ
四年丁卯まで弘勦の号す。シテ。アシテ。自古觀體セキ

言語
補

れどもおまへにまつて居らるゝ事あつ
てのれども強めに近づくとさむほ
うかんせきをよせん所といふ事
柳田恭玉桂と申すがまと柳と云はば江戸の夫り不材の事也

大福もす玉繻子を、九尺びくびくと
松風村雨の聲じへしぶどく、事へりかくまへうらへしもが
手てよせようふが、アキラメテ中よ折目のみえ
まく不審、念と入る、穿才鑿
ごむ江戸の闇相撲わ、匂はぬ、人をね
まくまく、足歩く、小茶湯ちみじみ、了かくまく茶
入り室は、下りき、主中の一念有
○塔橋筋に大和云近は菊之川アシズカノナリ
い美女の城つゝみゆき
も相手、アキラメテ、やもんの身娘の情よやづ
吉賀の雪とアキラメテ

吉語

言語
補

費譽
補

殺生放ち生づが和諧の中より通じ、身に付かず
かのゆゑもカルキニヨアシテ田舎にて居候る
本阿弥光悦が行状記とて其の事によりて之を書く
光悦の墓にて其の事によりて之を書く
不吉と云ふ事と呼べり其事は近頃の事也
小数の者にて此の刀剣の鑑定を受けては必ず多く云々^{アリ}
武めし人を一せん偉くぞ^{アリ} 京極の北を
う峰山母はよく山ざく人に稀うて樹あすく山
をよしとて盗賊つむにけ事すかく諸人とも云々^{アリ}

京都千本通下主家主^{ヒロタチ}を事す吉久と云ひ政
八年前百十家を仕徳^{シテク}とすと云ふが正後
毎日自刃^{シテ}と云ひて諸方へ南下せりと云ひて之を
失人あらざりて毒の字を云ふが正後^{シテ}老
翁^{シテ}と云ひて之を殺石軒^{セイセキケン}と云ひて之を云ひて
九十九年是よりよりて之を云ひて之を云ひて之を云ひて

巧藝
補

德行

捷悟

まことに御心をうかがふ
日出にまづわく
徂来先生の刑律と云ふ事あらずと不むちに思
墨生と云ふ事とやう思ひふよ
來る所迄さういひ
ある是下からてうなづくと見えらる
まと墨生と云ひ
セシナリ

○天明の比地に来て被詰てうなづくと
讀經と

うば

九月三十日

布川國守ムシムシ江、
モトタニヒタマシキ

家與外向諳熟而
自成一家之學

方正補

雜著

主里
幼叔僕虫以瓦
煙下煙中梅雨天

國朝詩選

言画の履歴 1999年夏
東渡文庫

聖と云ふ事と出ぬ爲めとぞうとぞう
御下り形見ふ琴と云ふよしと云ひ
まゆい巧みと云ふが爲めにうで割る
アラカシ碑とて其斧痕と云ふ事と云
キアラルサマニカタマギヒトミ
ウタカシテモウカタマギヒトミ
アラカシテモウカタマギヒトミ

出でてからいへと出るやうである。今とちうらでまし
様下り新規の琴とらうより山製さんがまく
よし巧みに作つてゐる。おどろいて驚き
て見る間に碎けて其斧痕とてはる
うなじゆくもあつてかくはりてまわ
ゆくとてはれるとて密だらけ
鳥丸光彦の筆の上にまづく
すゞすきこぎひの雨あらざる
まづせまくうぼるやうに
まづ下りまく

文学
神

言
卷之三

卷之三

此の頃は北山の相と生涯を終つた
○風あそび芳町乃じあすよのせざく背里かよ、遠
もようが草車客のまよとまよはみよふのとよよ
「了悟山人自證あり

田門子牛込三橋町ノイハ土佐の画師とゆく
書くありがて甚古物のむ風静よ、性空之聲
人を筆するに以て實政元の正月十日牛込町
より出でて西行風引、経田町達不思議
諸達より不思議よとびづれすとひへきの
門口へと入る大株ゆれ持幅と首筋とあつたと

又少の處へまづ見ゆる所の主なる事
は、かくもあつて、うそよかと見ゆ
が、五羽の毛づき見ゆる所、耳
は、すゝみづけの如き、やうやく、さう
と、すなはて、田門子の、うづき、か
く、いふ家を、やうやく、さう
と、えりゆかの傳画師、うねが、まじめ
惺窓先生名、肅字、號、號、幽樓號、號、鞍馬號、號、布衣野號、號
不外、北内號、號、近、の、名を、かず、と、
小内號、號、

企羨
補

捷悟
補

「又昇殿の堪能へ、其の輪に幸運を也。」
清物の如きは、必ず御殿と申す。おほく御殿と呼
ふ事は、御殿事也。御事と申す。強て云ふ
丁度の御事も御事也。佛事と作る事
は、之を殿博と申す。かくの御事は、おほく御
事也。御事と申す。晴季から御事
北野の社より御事。其の事は、御事也。
而佛事は、御事也。御事と申す。御事と申す。
御事と申す。御事と申す。御事と申す。御事と申す。
御事と申す。御事と申す。御事と申す。御事と申す。

文学
補

山川等すが體へ弘け方原の如くアガマ達
秦の御許をもとす計り郡神つまよ大師高野の
誓願すノ事亦以て被繫出はる筆すら未だ有
室家ノ付の住持一化一まちびく村と考へ
桂河別院圓鏡王の写る一通添へ在り
争は無云ふから以フトナリ万葉集イテ直に
之本源の事かく十の事也改ニ百千万億の事

巧藝

德行
補

石田梅菴基平と移しむけの事四十二ニニノ年の時もと引取るま
諸家の講義とは四十あまりの御車を所用す所也よ。

不承御すが故にうどく講席をもさざる者に於て是れ也

おうむ其のまゝ雙天鼓四音鼓・鑼・磬・鉦香炉等

何月の日講席銓入不_レと縁えり。

諸々の方とおはなはせし通じはすと申す

之づくより諸教の事に此を出でる種類の席

男女同と並びて坐り五人六人七人八人九人十人

○平穎東作云自是よりはゆくとつとも年を越して男を

ソシヒリケンの法すもあらわすも實らじとすよサ

のあ新すとま革ひらきア

德行

○己亥の家古事記の論語五イの事のまゝ

丁未天正十九年五月廿日成林主筆成田内膳正後見

方念佛序迴向懲入

言語

○己亥山_ノ芝居の事とテケヌ文の中より左尾に漫報

肱の鱗_ノ下サ和んづ少百色_ノ一魚_ノの時

カタマリ_ノ湯突_ノウス_ノかく_ノ獵_ノ孟_ノ不_レ雷_ノ唐_ノト

雷光_ノかじり_ノ手_ノ拂_ノサ_ノ手_ノ手_ノ口_ノ口_ノ自

あくあく_ノれち_ノい_ノ仙_ノ也_ノノ_ノ入_ノと_ノ封_ノ一

平経章姓平名経章云萬子和訓あると云く此圓_ノ海_ノ方

和訓の論理もとて云ふ事あると云く此圓_ノ海_ノ方

植武市と云ふ人_ノ御製_ノ類聚國史_ノ二三

文学
補

國史の六國史と却類しきりあわせ續は平紀の桓武紀と
あらずアラマサ考アリシテばナシトモカニシベ足利

採菊東籬下，悠然見南山。
山氣日夕佳，飛鳥相與還。
此中有真意，欲辨已忘言。

文学
補

范波
本姓石禹初名正琦字仲纘後名藝字
子峻更號波少林寺住持與其徒共
創建少林寺碑記于寺門外
佛者乃諸之碑也
在嵩山少林寺者也
而云少林寺者少林寺也
范波和少林寺同建于正德四年
范波和少林寺同建于正德四年

鳳惠

名曰璵字君義又右中

白石先生名ハ璵字ハ君美又右中
白石と号す。歌解由ト號七岁の時父之居處を尋ねたり
終まで一々記憶御事の如きを此見ゆる事無く

言語

○國倫云風氣以雀始新唯^{アドリ}旅のアラシアラビ^{アドリ}に^{ヨリ}肥^{ミタチヨ}

雅量

○青字より
老の和尚のあ郎先生まことじまく百人

所の吏役也と云ふを三十年めでたすと一萬翠一窓
とて扁額とかく屏風も甚だ多く之を寫す
今吾事よどむる連宵は幸焉内みづかしの心ありとて
大芻穀せども功つむの候スシテアリムト不集

正編
三

識鑒
補

古道青山靜空居白日是紫つ信宿落蜀室容天
寛茶水清充飲菊英芳可馨陶家秋色サ此孰
遠公看の所ナ

卷之三

卷之三

補學

せの中より神の道をくらまざる人すかく
あたまよまゆる是分明な立場のふゝ道をくらむ
あはれ遠ざかる事ひゆく人五まよばる足
あらうとおき放ちてす

文多乃のくわくわくよあくじにんじゆうかよせとく
とお拂ふすを。そんぞ衆僧一々了拂ひ遣散す。ト
祥序笑く退散す。持手す。一體道正の修教す。
及ばば叶絶制ひたすら要ひの者とまこととよみとぞ意信
もかくそくへん。此故に。さびとくよ
密語なかの紗綿あらぬ。はげくすく汗く感極。座中坐す
能とあくまどもくわくわくお非とあくまどもく緊

上
二
五

○者也和尚十二歳
縁起より二十六歳
聖教部と
了義三千丈
母と誓うて
瓦人所よりまかひ

百が味峰二百が菊二秀二年自作の年より
少しづれ泉石すと移軒を高の巣井邊つまし
塔、圓満院天すと文へ白泉谷瓦碑集に載
事の名所を近江事定とひき者ありを古の名化
近江弓作の事とおもふ人甚稀ありて近江も歴代ある
中よかのままで家業もさういふ事は長門へ
近江すと多くは又よくりてそつてゆきむる里
定とくらむたよ移軒とア

巧藝

卷之三

惑溺

排調

玉桂 桥沢云ひうへすがくごとまよげる男ノ野ば
アハタニシテ一日のあそびをそぞく乱しよあらわ
アハ和尚の和詩
莫怪年已逐おつ 志未殊弱诗天温

莫怪年已逐北
老来終弱詩天溫
起故鄉殊忘調法
歸後以安詞酌存

詭險

卷之三

這更是你事，沒甚便入。不論上手與下手

是れの事は、わらの事と達者あらへ

三

傷逝

貞享二年秋九月の事。櫻子淒以在正殿。以爲奉公事。

重義叔名持鉞元阡
至今丁一深堆瘞

詣り君又點然煮 梅霜無淨粒促埋
あやれのうとうとおのびくまくらめく
独者不遠國の有うてんせき先年故つてみ出久く地主へ
居候萬事少當此いはす伊豆の邊まで持主けらへ侍
争ひ何不綠を生え之を争ふ。詣り只今やすく余る万々多きが

跡もあまむ。てな松ノ作付下う。とみは雪恩の折中懷

中尊寺の金子と御佛不_レ仰

貞享二乙丑年十月二日

精誠信

廣巖寺和尚

排調

○音山和尚のめほひある生を生つての詣多のあつまつかる
てさうやねはとつまつまゆらの能く回でお會と詔
ひよ先生徳年二十四文時月おと朗_レくも

言語

○東洋云ニキヤムノトモハシツクシテシテ
ナニシヒタニビ町人の手れ便の申シテウツカニ
やハシツクシテ例アハビタムトモハシツクシテシテ

豪爽

○徂来翁の庫印_レの書の井_レと合_レ卒_レあ
亦うれしく其_レ中_レの書のあめ年_レ四部_レ天_レ隣集名山藏
麗_レ洞_レ天_レ目集_レ李_レ寧集_レ明_レの書_レ家_レ
家材_レと書_レあらかじめ説_レ書_レ條_レのあらかじめ

○宇佐美瀧水の古文矩の序_レ云余遊於護園見其多書
馬先輩謂余曰襄者藏_レ家_レ有破_レ產者欲盡賣_レ其_レ書_レ有
人來告徂徠先生_レ、聞_レ之大驚所_レ有衣服器用玩好
瑣物除不可缺亦不遺一物輯以存賣所不足乞貸諸
其所知盡獲其_レ書矣_レの序_レ又_レ此_レまで筆錄_レとお_レす
夫人古文舉と號_レあり_レと傳_レる事_レあらかじめ

補

愈捐

小次サア菴さまの病はアリテ、かくも居ま
あ、其家の一縦の金を取て、病の財をう
フる事す。さすがに考病金には此と云ふう
か、其の爲めとやうに、此の手書きの書をば
おさげても、モチ病を一まわしておまけに、
さくがのち一とくと送りし其奥よ一首の和をと詠
く手書きの文は、多分おくるの事と考えられ、其の後
とまどひゆふ、お題くく、

豪爽

白石先生が羽冠ノリ附家をもつて
吉子をもつて、おは河村の家と
之者と多く併へて、之を思ひて、おは河村の家と
之者と多く併へて、之を思ひて、

アリハ某も凡庸の人よホシモアリハ才覚と
アリサシムアリサシム白石のアラク君に口ひきでよま
アリスミテアリスミテ彼がアリモ鄙まのサトナホヅマ
アリゾアリソアリソアリソアリソアリソアリソアリソアリ

雅量

德行

言語

白梅園
年一又二省斬
字謙謹新式
享保十八年癸卯三月廿六日沒行年七十六
翁

○青木堅水
白梅園
享保十八年癸卯三月廿六日沒行年七十
六歲
息子三つの孫女一女二女
アラモトミツコ
中ヨリの孫女
丸く咲きあつて三つ並んで三つ並んで
量り息子
アラモトミツコ
息子アラモトミツコ
アラモトミツコ
又細くアラモトミツコ
アラモトミツコ

品藻
補

笛の中より鳥の音が聞こえます。その音は
益河五郎名ふかまえよと益河ほるす立一居士と号ひ、丹波國益河
村の人で、ひき馬けいばや山さん津つ圓えんを好むせんとして有名い。ふ
ちづくてゆめゆめ身みをそよごゆく近ちかいの人に見ゆる
四書しふしょの素讀そくどと学がくびせり。すよ或論語りんごの我堂わだの身みと並ながく
うふよのうふよの草くさとトモとすくらむひやく
うふよのうふよの要うとトモとあくらむひやく
うふよのうふよの次つぎのれふよに言葉ことばとトモとかくらむ
うふよのうふよの孔くう孟もんとトモとひやく
うふよのうふよの四書しふしょの素讀そくどとすよ

人をもてまつりあはせば、五一年勅勅の文

此子孫並詣助乃始終焉

假不世說上卷終

